

世界とつながり 未来を拓く 山口グローバル人。

世界を元気にした人は、
日本も元気にできる！

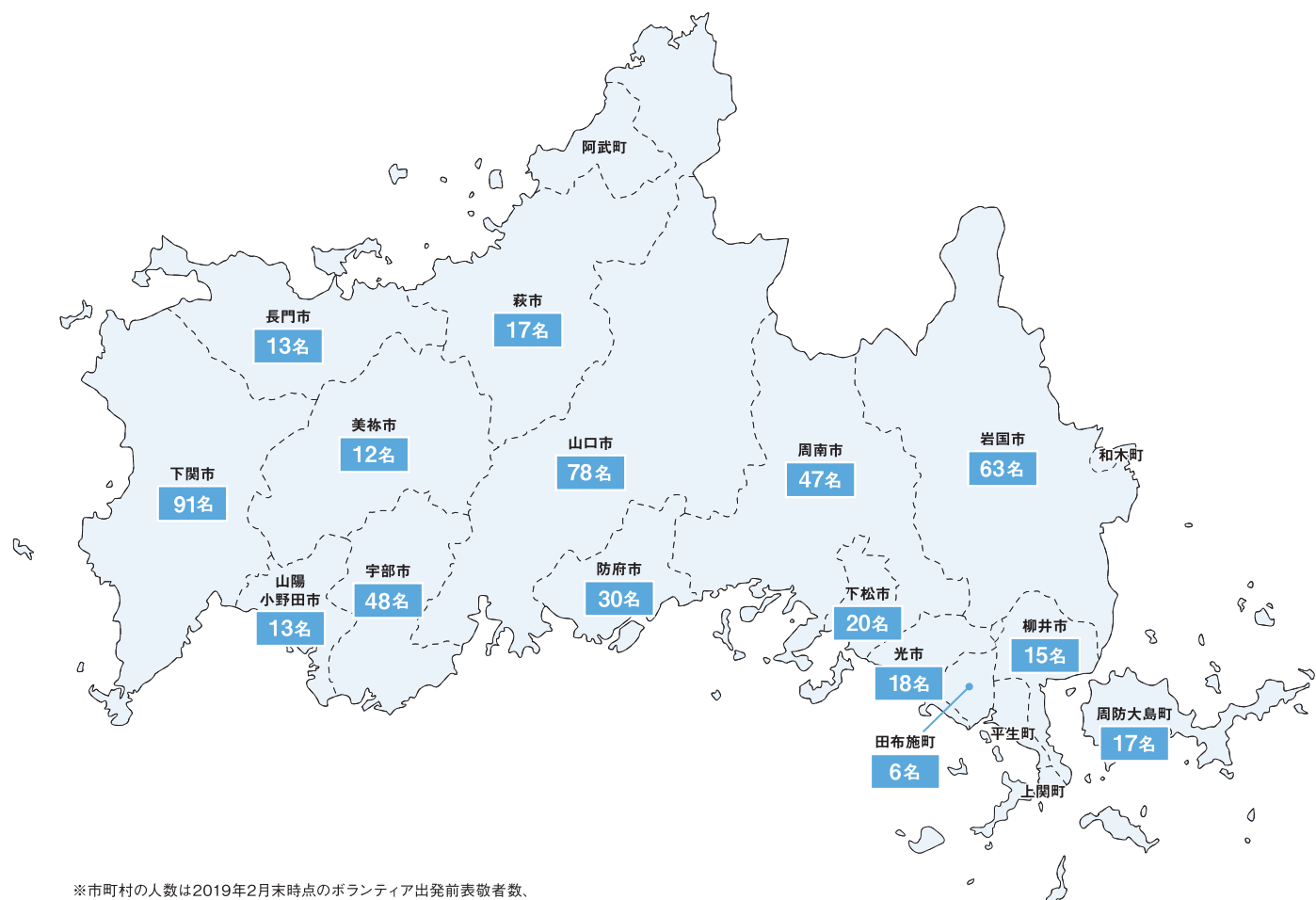


今度は地域を、もっと元気に

山口県から青年海外協力隊・日系社会青年海外協力隊に参加した人は570人を超えました。

今、山口県では、青年海外協力隊として活動後、この地域を元気にしようと、さまざまな場所でその力を発揮している人たちがいます。

《 山口県 青年海外協力隊及び日系社会青年海外協力隊派遣数 》



※市町村の人数は2019年2月末時点のボランティア出発前表敬者数、本文中の人数はデータベースの出身県に基づく派遣実績数となります。

人にも車にも常に自問自答
自分で考えるから力になる

No.01

山口マツダ株式会社
山口店 サービスエンジニア

木花 一さん
きはな はじめ

派遣国



ネパール

職種

自動車整備



偏見を持たない看護職を育成
世界の母子保健をサポートしたい

No.02

山口県立大学 別科助産専攻
看護栄養学部看護学科 講師

田中 和子さん
た なか かず こ

派遣国



ラオス

職種

助産師



器を作る、里山を守る
“半陶半農”で表現し続けたい

No.03

陶芸家

間鍋 竹士さん
ま なべ たけ し

派遣国



エチオピア

職種

陶磁器



山口で日本語教師を養成
プロとして仕組みづくりを

No.04

日本語教室(自営)、日本語クラブ山口
日本語教師

山尾 和宏さん
やま お かず ひろ

派遣国



インド

職種

日本語教師





人にも車にも常に自問自答 自分で考えるから力になる

No.01

山口マツダ株式会社
山口店 サービスエンジニア

木花 一さん

きはなはじめ

山口県出身。県内の工業高等専門学校を卒業し、自動車販売店に整備士として就職。27歳の時、国内全社で行われる自動車整備大会で全国大会に進み、そこでさらに世界大会を目指す仲間に出会い刺激を受ける。そのころ、父がJICAシニア海外ボランティアに参加。入社10年目、30歳という節目に退職し、協力隊へ。帰国後、現職。

▼派遣国



ネパール

▼配属先

サノティミ技術学校

▼職種

自動車整備

▼活動内容

技術学校自動車整備コースの教員に向けた、授業運営や指導方法のアドバイス、新しい自動車整備技術の紹介や導入指導。実際に生徒への授業も行う。

▼派遣期間 2011年1月～2013年1月

何かできることがあるはず

自動車販売店、自動車整備士として活躍する木花さん。16人で構成されるサービス部門の中心的存在として、仕事の割り振りや後輩の指導にも当たっています。

木花さんが故障した車を前にしてまず考えるのは、「できることはないか」ということ。「壊れた部品を交換するのは簡単です。コストと時間のバランスを取りながらですが、まずは何か打つ手がないか、工夫できることを探します」。このような姿勢には、協力隊での経験が大きく影響しています。

木花さんのネパールでの役割は、技術学校の自動車整備コースの教員を指導すること。ところが、教室である工場はガレキの山、ハトの糞や巣だらけだったため、清掃、整理整頓から始めました。授業当日に授業内容を決めるような状況を改善するために、年間のカリキュラムや資料を作り、授業運営や指導方法をアドバイスしました。EFIシステムや電子制御といった最新技術を伝えることも重要な任務。書面だけでは伝わりづらいため、JICAの車を借りて実物を見せながら説明。分かりやすく楽しく伝える工夫で、当初は聞く耳を持たなかった年上の教員らも授業に引き込んでいきました。



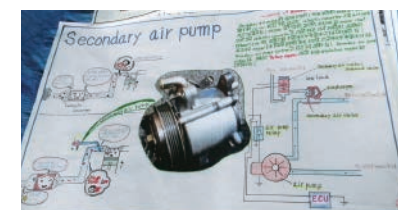
自分の殻を破った瞬間

現地で、車の燃料を送るホースがちぎれたことがありました。「交換するしかない」と思っていた時、一緒にいた仕事のパートナーが山でとってきた繊維質の植物を巻き付けて応急処置。物がないという現状を受け入れ工夫しながら暮らす姿、そこに喜びを見出している人々の姿に衝撃を受けたそうです。「創意工夫をする楽しさ、面白さを知りました」

英語よりも現地語のネパール語の勉強に励み、飲んではいけないと言われた生水を「現地の人も飲むから」と飲んでおなかを壊し、畑から抜いたばかりの土のついたニンジンにかぶりつく。そんな様子を見た現地の人に「面白いやつ」といわれ親しまれた木花さん。2年間で振り返り「協力隊で自分の殻を突き破る瞬間を体験できました。そして、どんな状況でもまずは受け入れることができる器ができたと思います。最高でした!」と満面の笑みを浮かべます。



(上)自動車整備科の教員への授業風景
(左)自分で作成した教材



なんとかなるし、なんとかする

今後の夢として「日本にいる以上はエンジニアとしての技術の向上をはかりたいですね。そして工場長のサポートをしながらスタッフを育てたい」と言います。スタッフが故障の原因が分からず整備に行き詰まっているとき、スタッフに代わって原因を突き止めることはしません。答えにたどり着くための方法を教えます。「答えは自分で見つけてほしい。自分の力になるからです。いずれ若い人も指導する立場になるのですから」

もう一度ネパールに行くことも夢。ネパール語を忘れないためにネパール語を話すスタッフがいる店を定期的に訪ね、協力隊で英語が十分に話せなかったという反省から英会話の勉強も続けています。「やらずに悩むより、やってみようというのがポリシー。なんとかなると思います。なんとかします!」と将来を力強く見据えます。



整備作業をする木花さん

木花さんは
こんな人!

山口マツダ株式会社
山口店
サービスマネージャー
有井 勉さん



自分のことを後回しにしてでも人のために動く人です。協力隊での経験によって、人の痛みが分かるからこそ困っている人を放っておけないのではないのでしょうか。今は現場の仲間を指導してもらっていますが、彼の目配り気配りで部門全体を、さらに店舗全体を見てほしいと思っています。全体を見て行動することができ、トップとなる資質を十分に持っている人材です。



偏見を持たない看護職を育成 世界の母子保健をサポートしたい

No.02

山口県立大学 別科助産専攻 看護栄養学部看護学科
講師

田中 和子さん

た な か か ず こ

山口県出身。助産師として京都の大学病院に勤務しながら、「いつかは海外ボランティアに」という思いが捨てきれず青年海外協力隊の説明会に参加。大学院に入るタイミングで病院を退職。大学院では小児看護学を専攻し国際看護論を学び、インドネシアで研究。大学院の友人の後押しもあり、大学院修了後に協力隊へ。2012年から現職。

▼派遣国



ラオス

▼配属先

ビエンチャン市保健局

▼職種

助産師

▼活動内容

協力隊員による「地域母子保健改善プロジェクト」で、健康教育や巡回診療を行い、伝統的産婆や村落ヘルスボランティアらが提供する母子保健サービスの質向上のための指導などを行う。

▼派遣期間 2008年9月～2010年9月

グローバルな視点を持った看護職を

「やまぐちから世界へ、世界からやまぐちへ」というモットーを掲げ、国内外の関係機関との連携を図り、地域に貢献する国際化推進事業に取り組む山口県立大学。田中さんは同大学の看護学科と別科助産専攻の講師として、浦山晶美教授のもとで母性看護学などを指導。2016年から国際看護論も担当しています。

「名前に“国際”とつくと、国際協力、ボランティアなどに目がいきがちです。大切なのは、人種、国籍、宗教、性別などにとらわれることなく、人を尊重した全人的ケアをすること。国際看護論を学ぶ上で、人種偏見を取り除くことは重要な部分です。その要素は、協力隊で行ったラオスで培うことができました」



壁をなくし、まずは人間関係

田中さんは、協力隊員による「地域母子保健改善プロジェクト」の2代目隊員。ラオスでは自宅分娩が多く、介助するのは無資格の伝統的産婆。体に異常があっても病院にくる人は少なく、妊産婦死亡率が高いという現状がありました。田中さんは普段は郡病院に勤務しながら、市保健局や医療従事者と協力して対象郡を巡回。妊婦健診、乳児健診、健康教育、予防接種などを実施し、母子保健の改善に取り組みしました。

このプロジェクトは、地域ぐるみで課題を共有し、共通の目標に向かわなければなりません。もっと病院に来てもらうには、伝統的産婆や地域で保健活動をしている村落ヘルスボランティアの理解と協力が必須。「彼女たちを否定するのではなく、女性たちに健康教育をしてもらう新たな役割を担ってもらえるように働きかけました」。現地スタッフと協力して、自宅で分娩する危険性、産後の生活の注意事項などを紹介するイラスト入りの教材を作成しました。

プロジェクトを進めるために、田中さんが力を入れたのは人間関係づくり。勤務中の昼食はもちろん、仕事以外でも声をかけられれば一緒に過ごしたそうです。「私がラオスの人たちとの間に壁をつくっているところがありました。人間関係ができてからは、ラオス人の方から巡回に行こうと言ってくれるように。何事もなんとかなる、諦めなければ大丈夫と実感しました」



(上) カウンターパートと作成した保健指導媒体
(左) 隊員として最後の妊婦健診

ラオスで学んだことを次世代へ

「ラオスで看護の本質を学ぶことができました。その経験を生かして、偏見を持たない看護職の育成に少しでも尽力できればうれしいですね」。実際、指導する学生の中に海外で働きたいという思いを持つ学生もいるそうです。「海外で経験を積みたいと思っているなら、迷わずチャレンジしてほしい。いろんな国の人と交わることで、コミュニケーション力も身に付きますし、やるべきことに気づき、活動が広がりますから」と田中さん。

今、田中さんはインドネシアの大学と共同研究を進めています。テーマは、国を越えて女性の健康をどうサポートしていくか。「国際看護論とは、最終的には人類の平和を考えることだと思うんです。またいつかラオスに行って、母子保健にかかわる仕事をしたいですね」と優しい笑顔で夢を語ります。



看護学科学生とスペインへのスタディツアー

田中さんは
こんな人！

山口県立大学 別科助産専攻
看護栄養学部看護学科
教授

浦山 晶美さん



人生を長いスパンでとらえ、学生たちが今、何を学ばべきか、どんな学びが必要なのかを把握し、指導にあたってくれています。課題を見つける力、思考力、実践力を持った人です。これらは、協力隊でプロジェクトを実施した経験、たくさんの人との出会いによって身に付けたものでしょう。学生たちに、広い視野でものをみることで選択肢が増え、人生の可能性が広がることを伝えてほしいと思っています。

“半陶半農”で表現し続けたい 器を作る、里山を守る



No.03 陶芸家
間鍋 竹士さん
ま なべ たけ し

山口県出身。佐賀大学物理学部に在籍中、友人と陶芸を体験。目に見えない世界を研究する物理と違って目に見える陶芸の世界の楽しさを知り、陶芸の道へ。佐賀県立有田窯業専門学校で2年間学び、卒業後は窯業試験場で1年間勤務。いろいろな経験を積み感性を磨きたいと協力隊へ。帰国後、2005年から作陶開始。2012年ごろから無農薬、無化学肥料の米作りも始める。

▼派遣国



エチオピア

▼配属先

エチオピア観光通商公社

▼職種

陶磁器

▼活動内容

観光土産物となる白磁を作る技術の指導、特に釉薬の開発。

▼派遣期間 2000年12月～2003年9月

土から器作りをする意味

「土を形にして器にするのが器作りなら、土作りから始めたい」。山口県内の山々に足を運び、土、石、鉱石を探し求め、かたっぱしから器にしてきた陶芸家の間鍋さん。諦めずに探し、ひたすら作り続けるものの、成功したのはほんの一握りだったとか。現在は、陶芸に適したブランド土を一切使用せず、土も釉薬もすべて山口県のものを使っています。「苦難を伴う作業でしたが、それでも土から始めることにこだわったのは、エチオピアでの経験があるからです」と話します。



力不足の実感がスタートになった

エチオピアでの間鍋さんの任務は、中国陶器のような白磁を作るための技術指導、特に釉薬の開発をするというもの。現地には白い器を作るための白い土がなく、土をすることから始めなければならませんでした。さまざまな文献にあたり、白に近い土をかき集めて牛の骨を入れて白さを出すなど、試行錯誤の連続。土はできても、釉薬は任期中に開発することはできなかったそうです。「環境が違えば全く通用しない、そんな自分の技術力のなさを実感しました」と悔しさをにじませる一方で、「あの経験があるから今がある」とも言います。

現地の人々は、狩りに失敗すればその日の食事が無いという、自給自足の生活。「生きるために生きる生活でした。人間の原点、それが自然の姿ではないか」という気づきが、「自分はこれでいいのか」という疑問に変わります。「協力隊に行ったからこそ感じる事ができたことですし、日本人だから協力隊にも行くことができました。この気づきが人生を変えた。自分の新たなスタートになりました」



(上)作業場で器の制作中
(左)作業場の仲間と一緒に

可能性は無限大、やることも無限大

帰国後は地元である防府市真尾で作陶活動を開始。土や釉薬を買って作るという日本では当たり前の工程に違和感を覚え、「自分で作るのなら自分で材料も採取しよう」と思い立ちます。山を切り開いた場所を訪ね、粘土層を見つけては地主にかけあって…。いろんな縁をたどり、やっと行き着いたのが山口市阿知須の粘土。この土をベースにして、鉱山で捨てられていた鉄を混ぜ、釉薬に松や樫の葉の灰を使って作品を作ります。5年ほど前から、自身で無農薬、無化学肥料の米作りもスタート。そのわらの灰を使った釉薬づくりにも取り組んでいます。

米を作りながら作陶する“半陶半農”を実現できる場所を探していたとき、同じ市内の久兼地区で農事組合法人を立ち上げた山本さん夫妻に出会います。「自然の中で生きていく自給自足の暮らしがそこにありました。私も自然の恵みをいかし、この環境を守りたい」という思いから、山本さんの活動を手伝っています。「エチオピアでの生き方のように、地元のものを使い、地元の人にかわいがってもらって、仕事をさせてもらえることがありがたい。無限大の可能性があり、やることも無限大。人生の中で、自分がどこまで表現できるか挑戦し続けたい」と静かな山間で情熱を燃やしています。



工房で作品を制作する間鍋さん

間鍋さんは
こんな人!

農事組合法人
久兼こぶしの里
山本 喜行さん



久兼こぶしの里は、2014年に設立した農事組合法人です。農業従事者の高齢化が進む中で、農地や里山を守っていくことができるよう、里山にある資源を有効活用し、林業、畜産、稲作の複合経営「アグロフォレストリー」を展開しています。里山を守り、資源を有効活用したいという思いは、彼が求める陶芸と同じです。彼が協力隊経験者と知り、農村の風通しをよくして活性化につなげてくれると感じました。間鍋さんは組合員であり、里山の将来を担う大切な人材。この里山を明るくしてくれています。



山口で日本語教師を養成 プロとして仕組みづくりを

No.04

日本語教室(自営)、日本語クラブ山口
日本語教師

山尾 和宏さん

やま お かず ひろ

山口県出身。学生時代から語学に興味をもっていたが、卒業後は語学とは関係のない職に就く。30歳で地元山口に戻り、福岡で日本語教師養成講座を受講。プロの日本語教師を目指す上で、さまざまな選択肢の一つとして協力隊への参加を決意、39歳でインドへ。現在は日本語教室を営み、日本語クラブ山口に所属、地域での国際交流に貢献。

▼派遣国



インド

▼配属先

デリーパブリックスクール協会バサントクンジ校

▼職種

日本語教師

▼活動内容

同僚教師と共に生徒に対する日本語及び日本語教授能力向上に協力。生徒(10～15歳)に日本事情・文化を紹介し、学習意欲の増進を図る。また協会の日本語教師間のネットワークづくりを支援。

▼派遣期間 2011年3月～2013年3月

日本語を伝えるナビゲーター

現在、山口県内で日本語講座を運営し、日本語を教え、日本語ボランティアを養成する活動などを行う日本語クラブ山口に籍を置く山尾さん。日本語クラブで日本語を教える活動をし、「山口に住む外国人で日本語を勉強できない方、たとえば企業で働く実習生らその家族の方たちに向け、何かできることはないか」と考え、日本語教室を自ら運営。教室を新山口の駅前に構え、さらに企業からの依頼を受けて山口市や防府など県内各地へ赴き、日常会話の指導から日本語能力試験のサポートまで行っています。日本に来ている実習生は、帰国後に技能だけでなく“日本で生活した証”として日本語能力試験を受験します。「それは、彼らの将来の選択肢の幅を広げます。日本語教師として、彼らの力になりたいと思っています」



どんな場所でも日本語を教えたい

山尾さんの目標は、日本語教師のプロになること。その方法は、国内で日本語教師の経験を積む、大学や大学院に進んで日本語の専門知識を学ぶ、海外に行き日本語を教えるなどたくさんあります。それらの選択肢から、「どの道がプロへの最短距離か」を重視して、山尾さんが選んだのが協力隊。学びたいという気持ちよりも、教えたいという気持ちが強い山尾さんにとって、現地で日本語に興味を持つ人に教えながら知識を深め、スキルを磨くこともできる協力隊活動は、自身の夢を叶えるためのチャンスでした。「どんな場所であろうと、私は日本語を教えたい」と日本語教育への情熱を膨らませ、インドへ赴きました。

インドでは生徒たちに日本語を教え、その生徒たちを教えるインド人の日本語教師の指導にもあたりました。子どもたちに日本語に興味を持ってもらうために、問題の例文に日本の人気アニメキャラクターを登場させるといった工夫も。「インドの方は日本のこと、日本の文化に対してとても好意的で、日本語教育に熱心でした。日本人として誇らしかった」と言います。



(上) (左)
担当学級での日本語の授業風景

挫折からプロの日本語教師へ

協力隊に参加する前のこと。日本語教師養成講座を経てプロの日本語教師として歩み始めていた時、自分が思い描いていた活動とのギャップに悩み、傷んで地元へ戻った時期がありました。ボランティアで日本語を教える日本語クラブ山口と出会ったのが、ちょうどそのころ。ボランティア活動をする中で、「日本語教師として一度は挫折したものの、再チャレンジしたいという気持ちが強くなっていきました。この活動の経験があったから協力隊への参加を決意することができ、そして今の自分があると思います」と振り返ります。

協力隊から帰国して4年。日本語教師としてやらないといけないことは、まだたくさんあると言います。「日本語教師は実力の社会。大学院で勉強するなどスキルが必要でキャリアなども求められます。もっと自分自身、さまざまな活動を通じ、日々目の前にあることに誠実に向き合いながら成長していきたい」と力強く語ります。



日本語クラブ山口での授業の様子

山尾さんは
こんな人!

日本語クラブ山口 代表
※山口大学・山口県立大学
非常勤講師

吹屋 葉子さん



山尾さんはインドから帰国後、日本語講座だけでなく、県内の企業から技能実習生の日本語指導を依頼される案件についても、とても積極的に携わってくれています。授業の切り口を工夫するなど、新しい試みへの意欲が高いのは彼の経験値からではないでしょうか。留学生への対応実績もあり、信頼しています。将来、山口県の日本語教育におけるリーダー的存在になってほしいです。



世界を変えてきたのはいつの時代も、たったひとりの強い想いだ

青年海外協力隊は現地の人びとと同じ言葉を話し、

ともに生活・協働しながら開発途上国の国づくりのために活動しています。

1965年に開始され、これまでに91か国に44,000名以上を派遣しました。

JICA中国

〒739-0046 東広島市鏡山3-3-1

TEL:082-421-6300(代表)

FAX:082-420-8082

URL: <https://www.jica.go.jp/chugoku/>

JICA海外協力隊

Q 検索

独立行政法人 国際協力機構 中国センター